九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[2012/2013] 九州大学附属図書館研究開発室年報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/27257

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2012/2013, 2013-09. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

平成 24 年度における研究開発

1　統合移転後の新図書館計画に関する調査研究

室　　員　堀　　賀貴（人間環境学研究院教授）
職　　員　堀　　優子（利用支援課サービス企画係長）
担当窓口　松石　健祐（図書館企画課企画係長）

＜研究開発の概要＞
新中央図書館建設に向け，必要とされる図書館機能及びそれらを実現するための施設設備・サービスに関する調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
22年度より新中央図書館検討専門部会の下に設置された「新中央図書館基本計画検討ワーキンググループ」の座長を堀賀貴室員が務め，基本計画の策定を続けている．24年度は新中央図書館が備えるべき収蔵能力，座席数，および各階のゾーニング等について検討を行った．また，堀室員は新中央図書館が建設される伊都キャンパスの文系地区の基本設計計画の検討コアチームにもワーキンググループを代表として委員として参加し，地区の設計にあたり新中央図書館基本計画のコンセプトが適切に反映されるよう提言等を行った．
また，職員2名（松石，堀）が24年度に新たに開館した国内2大学（明治大学和泉図書館，立教大学池袋図書館）を視察し，各館の担当者と意見交換を行った．視察内容は平成24年度附属研究開発室活動発表会において報告された．

2　海外の大学図書館に関する調査研究

室　　員　松原　孝俊（韓国研究センター教授）
職　　員　北島　光朗（利用支援課資料サービス係）
担当窓口　松石　健祐（図書館企画課企画係長）

＜研究開発の概要＞
海外，特にアジア諸国の大学図書館との図書館間交流の推進についての調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
24年8月に韓国の全南大学校図書館の職員が来訪し,伊都図書館の施設見学を行うとともに両国における図書館サービスの現状等について意見交換を行った．また24年9月にはイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校と学術交流協定を締結した．協定の締結に先立ち，6月には図書館職員がイリノイ大学図書館を訪問し，業務上の協力体制について意見交換を行ったほか，7月にはイリノイ大学よりPaula Kaufman氏（アーバナ・シャンペーン校図書館長兼図書館部長）が来訪し，川本図書館長をはじめ業務担当者と意見交換を行った．その他，インディアナ大学図書館ブルーミントン校図書館部長の来訪があったほか，トロント大学図書館とは学術交流協定を延長し，引き続き密接な協力関係を継続する予定である．

３　図書館職員の専門性育成に関する調査研究

室　　員	石田　栄美	（附属図書館研究開発室准教授）
	岡崎　　敦	（人文科学研究院教授）
	川平　敏文	（人文科学研究院准教授）
職　　員	古賀　　香	（資料整備室図書受入係）
	山根　泰志	（資料整備室図書目録係）
	古賀　京子	（利用支援課資料サービス係）
担当窓口	久原　明美	（資料整備室長，図書館専門員）
	諸岡　静児	（文系合同図書室長，図書館専門員）

＜研究開発の概要＞

九州大学が所蔵するコレクションについて，その由来や内容，価値，目録形成等についての調査研究を行うとともに，その成果を共有化することにより，サブジェクトライブラリアンとしての職員の専門性育成を図っていく．

＜研究開発の内容＞

1．連続講演会「ライブラリーサイエンスの現在」の開催

23年4月に設置された大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻との共催による連続講演会「ライブラリーサイエンスの現在」を昨年度に引き続き開催した．この講演会は，図書，文献，記録情報の管理についての最新の動向を提供することで，本学の教職員・学生の研究，教育，業務運営の向上に資するとともに，図書館職員をはじめとする関係領域の職員の専門性の向上を図ることを目的とされた．24年度は8回開催し，参加者数は計264名，23年度から通算すると475名にのぼった．第15回の講演をもって連続講演会は終了となったが，講演会の動画は九州大学公式YouTubeで公開し，学内外へ広く発信している．

[第8回]　4/25　情報へのアクセスの高度化と自然言語処理
　講師：冨浦洋一　システム情報科学研究院教授
[第9回]　5/30　九州帝国大学法文学部の創設　－大学文書館資料から見た－
　講師：折田悦郎　大学文書館教授
[第10回]　6/27　太平洋戦争開戦経緯の研究をふり返って　－思索し，資料を探し求めて－
　講師：三輪宗弘　記録資料館教授
[第11回]　8/21　歴史的公文書保存と人材育成の展望
　講師：針谷武志　別府大学史学科教授
[第12回]　9/24　情報の法的取扱いとライブラリーサイエンス
　講師：酒匂一郎　法学研究院教授
[第13回]　12/19　江戸版本書誌学の諸問題　－本学所蔵書籍を中心に－
　講師：川平敏文　人文科学研究院准教授
[第14回]　1/23　高等教育の電子教材における他人の著作物の利用と問題点
　講師：吉田素文　医学研究院教授/附属図書館副館長
[第15回]　2/20　武雄市図書館問題から考える図書館の現在　－指定管理者，個人情報・プライバシー保護をめぐって－
　講師：湯浅墾道　情報セキュリティ大学院大学教授

2．雅俗文庫目録の公開

21年度に受け入れた中野三敏名誉教授の旧蔵書である「雅俗文庫」について，人文科学研究院の教員・大学院生とともに，24年度も継続して書誌情報の採取・データ入力を実施し，「九州大学所蔵コレクション目録データベース」で簡易目録を公開している．

分類については，中野名誉教授による分類名をもとに川平敏文室員が作成した分類表に基づき，請求記号の付番方針を決定した．今後配架場所等を検討し，図書館システムへの登録を順次進めて行く予定である．

3．本学所蔵コレクションの調査研究

24年度は，本事項参加職員を中心に桑木文庫の調査・再整理を行った．桑木文庫は，近代日本を代表する物理学者であり，九大理学部の基礎を築いた工学部教授桑木彧雄が，工学部数学物理学教室に蒐集した科学史文献を，理学部移管後に斯く称したものであり，国内有数の科学史コレクションとして広く知られている．遡及入力は完了しており，近年では数理学研究院により電子化も進められている．

その桑木文庫について，元々冊子体の目録に記載されていた図書や，手書きで追記された図書が，天文和算資料群や書庫の理学部エリアに入っているものがあることがわかり，調査の上，約50件につき桑木文庫に編入した．併せて桑木文庫の不明図書リストを作成し，不明図書の現状を把握した．これらの作業により，誤って不明扱いになっていた図書を復元することができた．

また，桑木文庫と複雑な関係にある理学部教授伊藤徳之助旧蔵本や，由来不明の梅田三郎和算書につき，調査を進めた．伊藤徳之助旧蔵本は，地球物理学関係の図書，特に江戸期の地震災害資料を多く含むことに特徴がある．梅田三郎は，陸奥中村藩和算家で二宮仕法により相馬を復興したことで知られる荒至重の門下であること，和算書中には至重の写本（『一千題之内丙之解』）やその師である内田五観の和算書の写本が含まれていること，日本学士院にも梅田三郎の和算書が所蔵されていること等が判明した．

4　学習・教育活動との連携に関する調査研究

室　　員	吉田　素文	（附属図書館副館長，医学研究院教授）
	冨浦　洋一	（システム情報科学研究院教授）
	井上　　仁	（情報基盤研究開発センター准教授）
職　　員	堀　　優子	（利用支援課サービス企画係長）
	宮嶋　舞美	（情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当）
	大村　武史	（伊都地区図書課企画運営係）
担当窓口	古賀　幸成	（利用支援課長）

＜研究開発の概要＞

大学における学習・教育活動と連携した新たな教育支援のあり方について調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞

1．「ICTによる自律的学習・教育体制の構築」の取り組み

「平成24年度九州大学教育の質向上支援プログラム（EEP）」において，「ICTによる自律的学習・教育体制の構築」の取組が平成23年度から継続して採択された．

本取り組みは，附属図書館とその付設教材開発センターおよび統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻が一体となって，理論に基づく教授方法を全学的に推進し，ICTと学術情報基盤を活用した教育の効果を最大限に発揮することにより，教育基盤の価値を生かした自律的学習者の養成とその自律的な学習学修を支援する教育方法を軌道に乗せることを目的とするものである．

2年目となる24年度の取り組み概要は，以下のとおりである．

1) ニーズ調査

自律的学習者の育成という観点から，現在の教育環境やニーズを詳細に把握するため，教員や学生を対象にアンケート及び聞き取り調査を実施した．

2) 職員研修

理論に基づく教授方法を推進していくための人材育成方策として，学外における教授技術に関する研修プ

ログラムへ本取組スタッフが積極的に参加した．また，学内図書館職員向けインストラクショナル・デザイン(ＩＤ)研修を企画・実施した．

3) 学生との協働

図書館における自主的な学びを促進する目的で，学部4年生および大学院生を図書館学習サポーター(Cuter)として雇用し，図書館職員との協働による学習支援プログラムを開発した．

4) 教材開発と利用促進

高い学習効果を上げ，かつ能動的学習者の養成を促進することを目的とするモデル的なｅラーニングコンテンツを開発(Cute.Guides)し，さらに同教材のモバイル・デバイスでの利用を促進した．

以上は，23年度から継続した取り組みであるが，24年度は，様々な手法・アイデアを取り入れ，さらに新たな取り組みを企画・実施するなど，より発展させることができた．

また，24年度は，新たに以下の取り組みを行った．

5) 成果発信

EEPの取り組み成果を積極的に発信した．

①ウェブサイトの活用

・インストラクショナル・デザイン研修のページを図書館ウェブサイトに作成（学内限定）

・Cute.Guidesを図書館ウェブサイトの「学習」コンテンツからリンク

②シンポジウムの開催

・MOOCsと電子図書館のための国際セミナーとワークショップを大学ICT推進協議会等と共催で開催（2/24）

③学協会での発表

・情報メディア学会研究大会でパネルディスカッションに参加

「重なり合う実空間と電子空間：ラーニング・コモンズxディスカバリサービス」パネリスト 天野絵里子（7/7）

・24年11月17日(土)日本図書館情報学会研究大会（九州大学）で発表

吉田素文「電子教材作成支援は図書館情報学の範疇か？:他人の著作物を含む電子教材の作成支援における大学図書館の役割」（11/17）

・Q-Conference （場所：九州産業大学）にてCuterの活動を学生自らがポスター発表（3/2）

④全教職員ならびに学外への冊子配付

報告書をiBook形式およびPDF形式でQIR（九州大学学術情報リポジトリ）を通じて配信

⑤その他

・附属図書館研究開発室年報に23年度の成果を掲載．

兵藤健志, 天野絵里子, 中園晴貴. 大学図書館活用セミナーをリデザインする:インストラクショナル・デザインを意識した図書館ガイダンスの取り組み. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2011/2012, p.24-31, 2012.7. http://hdl.handle.net/2324/24952

・LibGuidesの解説記事を国立国会図書館の刊行物に投稿.

天野絵里子.つながるLibGuides：パスファインダーを超えて. カレントアウェアネス-E. No.234, E1410, 2013.3.28. http://current.ndl.go.jp/e1410

6) 学内連携体制の整備

・大学評価情報室，学務部および附属図書館研究開発室と，学習成果と図書館利用との関連の検証などについて，今後の連携について検討を進めた．

・ICTを活用した医学教育について，医療系統合教育研究センターと教材開発センターの今後の連携が実現した．

以上の取り組みの成果は，自律的学習者の学習成果となって最終的に現れることを期待したいが，今後，これらの取り組みを推進していくためには，さらに多様な学内組織と，より深く連携することが必須であることが明らかになった．また，26年度以降本格的に始まる基幹教育との協働も視野に入れ，本取り組みで整備した体制をさらに活用し，発展させる必要があると考える．

2. 初年次教育と連携した授業への取り組み

学生の読む力・伝える力の向上や，興味・視点の拡大，読書推進等を目的として，附属図書館と初年次教

育を担当する教員，及び活字文化推進会議*と連携した授業実践「よむつたえる」を企画し，以下の取り組みを実施した．

1) 一年生コアセミナーにおいてビブリオバトルの実践

法学部, 農学部及び21世紀プログラムの各1クラスのコアセミナー(全学教育1年次前期必修科目)の授業でビブリオバトル**の実践を行った．

2) よみサポプログラムに参加

より多くの若い人に新聞や活字に親しんでもらうことを目的に，読売新聞社が大学生に新聞を無償で提供する「よみサポプログラム」に九州大学として参加し，公募で選ばれた80名の九大生が半年間，毎朝新聞の届く生活を体験した．

3) 新聞を活用したゼミ

上記プログラムを利用し，21世紀プログラムでは新聞を活用したゼミを実施した．ゼミの前半では，読売新聞社から講師を招き，新聞の作られ方，記事の書き方などについてレクチャーを行った．

4) 公開授業として，フォーラムを開催

25年1月26日(土)，分かりやすいニュース解説でおなじみのジャーナリスト池上彰氏を招き，「何のために学び，何のために伝えるのか」と題した公開フォーラムを開催し，第1部の講演，第2部では，池上氏と21世紀プログラムの学生が，教養教育のあり方等についてディスカッションを行った．

以上が取り組み概要であるが，各取り組みに参加した学生及び実施教員に対して，アンケートやヒアリング等を実施し，検証を行った．（詳細については，本誌P．34～43の事例報告を参照のこと．）

この検証結果を踏まえ，平成25年度は，目標設定をより明確にした授業に取り組みつつ，今後の九州大学の教養教育の改革を見据えた新たな教育との連携のあり方を検討していく．

* 活字文化推進会議-----読売新聞社が出版関係業界と協力して発足, 本や新聞などの活字文化を守り育てるための「21世紀活字文化プロジェクト」を展開している．

http://katsuji.yomiuri.co.jp/

** ビブリオバトル-----「人を通して本を知る．本を通して人を知る．」をコンセプトとした，本を用いて人と人を繋げ，人と知識を繋げる，知的遊戯．各人5分間で本を紹介したのち，2～3分間のディスカッションを行い，最後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員で行い，最多票を集めたものを「チャンプ本」とする．

５　図書館マーケティングに関する研究開発

室　　員　馬場　謙介（附属図書館研究開発室准教授）
池田　大輔（システム情報科学研究院准教授）
伊東　栄典（情報基盤研究開発センター准教授）
南　　俊朗（附属図書館研究開発室特別研究員，九州情報大学教授）
職　　員　井川友利子（利用支援課サービス企画係）
担当窓口　堀　　優子（利用支援課サービス企画係長）

＜研究開発の概要＞

利用状況の分析を基にした図書館マーケティングと，それを活用したサービス・利用環境の改善，新たなサービスの創出に関する研究開発を行う．

＜研究開発の内容＞

○貸出データの解析

今年度も従来から進めてきた図書貸出記録の分析を継続した．特に貸し出された図書のNDC（日本十進分

類）カテゴリを利用した興味分野に関する学生や学部の特徴や相関の分析を行った．研究成果は３件の国際会議論文として発表した．

図書館データの解析手法を授業データに適用することで，新たに授業データの解析を開始した．出席や宿題を努力指標，試験の成績を成果指標とし，努力と成果の関連性を分析した．また，学生による自分自身や授業に関する評価アンケートの結果も合わせた分析も行った．今後は図書館データだけではなく授業データなども合わせて学生の学びへの姿勢を分析した結果を図書館の学生サービス向上につなげていく研究へと発展させていきたい．

６　学術情報リポジトリに関する研究開発

室　　員	馬場　謙介（附属図書館研究開発室准教授）
	荒木啓二郎（システム情報科学研究院教授）
	竹田　正幸（システム情報科学研究院教授）
	冨浦　洋一（システム情報科学研究院教授）
	池田　大輔（システム情報科学研究院准教授）
	廣川佐千男（情報基盤研究開発センター教授）
	伊東　栄典（情報基盤研究開発センター准教授）
	森　　雅生（大学評価情報室准教授）
職　　員	小柳　真弓（eリソースサービス室リポジトリ係）
担当窓口	野原ゆかり（eリソースサービス室リポジトリ係長）

＜研究開発の概要＞

学術情報リポジトリのコンテンツ拡充及び発信機能強化と教育研究活動への活用のため，機能の高度化，システム間連携，検索システム等に関する研究開発を行う．

＜研究開発の内容＞

機関リポジトリに蓄積される学術論文，特に，学術雑誌や学術会議等のように査読を経て出版社から出版される論文の登録数を増やすことを目的として，「文献自動収集・登録ワークフローシステム」の開発を行った．このシステムは文献自動収集機能と登録ワークフロー管理機能の2つの機能を実現している．文献自動収集機能では，外部の学術論文データベースでの検索結果等に基づいて，著者へリポジトリへの登録依頼を行う．著者の自発的な登録を待つ代わりにリポジトリの管理者が登録の催促をするとともに，書誌情報の再利用によって登録作業の軽減を実現する．登録ワークフロー管理機能は，国内の複数研究機関に対する調査によって作成されたワークフローに基づいて，リポジトリ管理者の登録作業の進捗管理を行う．特に，時間を要する出版社の著作権ポリシーの確認については，外部データベースを用いて自動的にポリシーの確認を行う．また，九州大学において開発したシステムの試験運用を行った．このシステムの導入によって，文献自動収集機能については，学術雑誌・学術会議論文の登録数が著しく増加した．登録ワークフロー管理機能については，著者からの論文登録要請が大幅に増加したにもかかわらず，リポジトリ管理者の登録作業効率の顕著な悪化は見られなかった．

7　教員・学生のコミュニティ及びコンテンツ形成に関する研究

室　　員　池田　大輔（システム情報科学研究院准教授）
井上　創造（附属図書館研究開発室特別研究員，九州工業大学准教授）
担当窓口　片岡　　真（情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当専門職員）

＜研究開発の概要＞

学生や教員，または研究者同士のコミュニティを中心とした活発かつ効果的な教育研究のために，SNS（Social Networking Service）システムを基盤とした新機能の研究開発を行う．

＜研究開発の内容＞

以前から，システム情報科学研究院において，コミュニティをベースにした情報共有基盤システム Magnet を構築し，部局内にて運用している．本年度は，様々な外部データベース（研究者情報DBやReaD等）と連携できることを目標として，データベースの形態や連携プロトコルの在り方など基礎的な検討をベースに，実際に動くプロトタイプを構築し，実運用における問題点の抽出を行った．

また，プロジェクト型学習（Project-based Learning: PBL）のためのコミュニティ支援Webシステムを以前から運用しているが，今年度は，複数のプロジェクトを一括して扱いやすくし，また相互のコメントが相互評価に直接つながり，成績付けにまで活用できる機能を一から作成した．これらのシステムは複数の講義で一年間運用され，講義運営の効率化ときめ細かい学生評価につながった．

8　RFIDおよびスマートセンサを使った図書館に関する研究

室　　員　藤崎　清孝（システム情報科学研究院准教授）
井上　創造（附属図書館研究開発室特別研究員，九州工業大学准教授）
南　　俊朗（附属図書館研究開発室特別研究員，九州情報大学教授）
担当窓口　宮岡　大輔（伊都地区図書課利用サービス係長）

＜研究開発の概要＞

図書館業務の効率化及び新たなサービスの創出のため，RFID（Radio Frequency Identification)を用いた図書館システムの調査や無線通信技術に関する評価を行うと共に，センサネットワークやスマートフォンなどの技術を用いたスマートセンサを組み合わせた新しい図書館システムの実現に向けた調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞

無線技術を用いたRFID (Radio Frequency IDentification) システムは，図書館業務の電子化，自動化やサービスの拡大に大きく寄与することが期待される．

今年度も，昨年度に引き続き，RFIDシステムの性能評価とその向上を目指した検討，スマートセンサを組み合わせた応用として行動センシングに関する研究並びに関連技術に関する調査を行った．

図書に貼付するタグは，サイズや厚さ，コストなど運用上の制約が大きく，タグの改良により性能向上を図ることは容易ではない．一方，リーダシステムについては，サイズや構造の変更は容易であり，自由度も大きい．まずは，既存の卓上リーダを用いて，放射される電磁界の広がりと強度，及び周りの環境が性能に与える影響を評価すべく，リーダを設置する台が金属板である場合の性能を評価した．その結果，リーダから放射される電磁界はリーダ中心部の読み取り性能を最大限にすべく，設計されていることが明らかになった．また，金属板上にリーダを設置した場合，その性能が大幅に低下すること．金属板とリーダの間に若干の空間を設けることで，性能はほぼ改善されることなどが明らかになった．この結果を電子情報通信学会九

州支部学生会講演会で報告し，学生会講演奨励賞を受賞した[1].

次に，スマートセンサの活用の一部として，携帯センサから在室状況を判別するアルゴリズムを開発した．スマートフォンなどの携帯センサを看護師に持ってもらい，加速度と音声を病棟で記録し，そのデータから看護師が病室に入室した時間帯を判定することができた．一方，病室に設置された騒音，照度，ベッドセンサから看護師の入室を判別するアルゴリズムも開発した．これらの技術は，図書館において利用者やスタッフの在室判定を行うことへの応用も可能となる．

今後も，卓上リーダやインテリジェント書架など，RFID技術の性能向上を目指した検討を遂行し，図書館に適したRFIDシステムの提案を目指す．更にスマートセンサ技術を適用した図書館システムを検討していく．

[1] 新美孟，藤崎清孝，“図書管理用卓上型RFIDリーダの高性能化に関する研究1 －卓上型リーダの基本性能の評価－”，2012年度電子情報通信学会九州支部学生会講演会，長崎大学，2012.9.26.

９　eリソース流通基盤に関する研究開発

室　　員　馬場　謙介（附属図書館研究開発室准教授）
池田　大輔（システム情報科学研究院准教授）
伊東　栄典（情報基盤研究開発センター准教授）
南　　俊朗（附属図書館研究開発室特別研究員，九州情報大学教授）
担当窓口　片岡　　真（情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当専門職員）
天野絵里子（eリソースサービス室eリソースサポート係長）

＜研究開発の概要＞

図書館サービスと大学の利用者認証基盤との連携や電子コンテンツ流通に関する研究開発を行う．

＜研究開発の内容＞

1．研究者情報データベースと機関リポジトリ(QIR)との連携の検討

九州大学の研究者情報データベースを管理している大学評価情報室と協議を行い，研究者情報データベースと機関リポジトリとの連携を検討した．研究成果の研究者情報データベースへの登録と同時に機関リポジトリへの登録を可能にするために，著者・論文の同定方法や本文ファイル等の受け渡しについて意見交換を行い，大まかな枠組みを決定した．平成25年度にこの連携機能の実装を行う予定である．

2．Shibboleth認証基盤を活用した図書館ウェブサイトでのeリソース利用環境の研究開発

これまで附属図書館では，Shibboleth認証基盤を活用し，EZproxyを通じての学外からのeリソースを利用するリモートアクセス環境の整備を進めてきた．「どこでもきゅうと」というサービス名称とともに，利用者にもある程度浸透したが，ウェブサイトの中で特定のページにアクセスし，リストの中からeリソースを選び出して使うという経路をたどらなければならず，そのサービスを知らない者にとっては利用されにくいという課題があった．

平成24年度を通じて開発を進め，平成25年3月に公開した新ウェブサイトでは，利用者が学外からアクセスしたときは，ウェブサイト全体に学生IDもしくはSSO-KIDでログインすることによって，特定のページではなく通常のeリソースのリストから使いたいリソースを選ぶだけでEZproxy経由の利用を可能とした．また，GakuNin（学術認証フェデレーション）を通じたeリソースプラットフォームへの直接のログインによるリモートアクセス利用も，ウェブサイト上でスムーズにナビゲートしている．

10　著作権問題に関する調査研究

室　　員　　黒澤　節男（附属図書館研究開発室特別研究員）
担当窓口　　中尾　康朗（利用支援課文献流通サービス係長）

＜研究開発の概要＞

図書館サービス全般における著作権問題の解決を図るとともに，学術情報発信及び教材作成等における著作権問題について調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞

大学図書館で所蔵する資料の複製についての取り扱いは著作権法第31条に規定されているが，その法文だけでは一義的に判断できないことが多い．様々なかたちで公表された，著作物の利用について対応しなければならない担当窓口では利用者が求める複製行為が適法なのか違法なのか判断に迷うことが多い．また，著作権法を遵守することが，より手軽に広範囲な複製を希望する利用者とのトラブルの原因になることもある．最近では，このような複製問題以外にも，遠隔キャンパス間の文献の送受や機関リポジトリ導入に伴う新たな著作権問題も生じている．さらに著作権法の改正や，運用ガイドラインの公表等，図書館の著作権問題に変化がおこっている．

このような状況下において図書館員としてどのように対処するべきか，著作権法を十分に理解し，今後より多様化するであろう図書館サービスについて各自が適切な対応ができるよう様々な活動を行っている．

以下は本年度の主な活動である．

黒澤室員は，毎年5万部ほど作成し全国的に無料配布されている小冊子「図書館と著作権」（著作権情報センター）改定版を微修正の上刊行し，本学附属図書館職員等にも多数配布した．また，２４年６月に著作権法の改正が行われ，国立国会図書館がデジタル化した絶版等一般に入手することが困難な資料等について大学図書館等でも複製サービスできることになったことに伴い小冊子のQ&Aの修正を行い，新年度に刊行の予定となっている．

また，５年前に発行した「機関リポジトリと著作権Q&A」（広島大学図書館）の改訂に取り組み，新たなQ&Aの追加や参照URLの変更など，その後の変化に対応した形での修正を行い「改定版」として刊行．学内外に配布した．

さらに，室員は，「著作権文献・資料目録2011」（著作権情報センター）を大家重夫久留米大学名誉教授と共同編集し，著作権情報センターのホームページのデータベースとして検索できるようにまとめあげた．

なお，今年度は，学内での個別の著作権問題は殆んど生じておらず，それぞれの部署で適切な対応ができているものと思われる．

11　貴重資料の画像及び書誌データベース作成に関する調査研究

室　　員　Wolfgang Michel（附属図書館研究開発室特別研究員）
　　田中久美子（システム情報科学研究院教授）
　　中里見　敬（言語文化研究院准教授）
職　　員　中尾　康朗（利用支援課文献流通サービス係長）
　　山根　泰志（資料整備室図書目録係）
　　宮嶋　舞美（情報システム部情報基盤課デジタルライブラリ担当）
担当窓口　野原ゆかり（eリソースサービス室リポジトリ係長）
　　井ノ上俊哉（医学図書館専門員）

＜研究開発の概要＞
本学が所蔵する貴重資料等の調査を行うとともに，そのデータベース作成におけるコンテンツ形成及びシステム・インターフェース構築に関する調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
1．濱文庫所蔵唱本目録作成
本研究班では，濱文庫所蔵唱本について詳細な冊子体目録を作成しながら，将来的に電子目録を公開できるよう，フォーマットに則りデータ等を蓄積している．その成果は紙媒体以外に，九州大学学術情報リポジトリでも公開し，学内外へ広く発信している．
今年度は，「濱文庫所蔵唱本目録稿（五）」を『九州大学附属図書館研究開発室年報』2011/2012に，「濱文庫所蔵唱本目録稿（六）」を『言語科学』第48号にそれぞれ掲載した．

2．国文学研究資料館への「総合目録画像データベースシステム」移植
九州大学附属図書館が開発した総合目録画像データベースシステムの利用について，平成24年11月，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館と覚書を締結した．附属図書館が無償提供したソフトウェアにより，国文学研究資料館は「近世語彙カードデータベース」を構築し公開した．

12　資料保存に関する調査研究

室　　員　三輪　宗弘（附属図書館付設記録資料館教授）
職　　員　香川　朋子（図書館企画課企画係）
　　古賀　京子（利用支援課資料サービス係）
　　大田　　海（利用支援課文献流通サービス係）
　　原賀可奈子（資料整備室図書受入係）
　　羽賀真記子（資料整備室図書目録係）
担当窓口　堀　　優子（利用支援課資料サービス係長）

＜研究開発の概要＞
本学が所蔵する資料の保存・管理体制に関する調査研究を行う．

＜研究開発の内容＞
1．生物被害の調査と対策
寄贈受入資料から虫害が発生したことに端を発し，生物被害を中心とした調査と対策を下記のとおり実施した．本事項と現場の職員との連携により実施方法や頻度・時期等を適切に設定することで，一過性の対策

に終わるのではなく，日常業務の中で継続的に実施できるようにし，長年の懸案であった，実質的継続的な資料保存対策の一歩が踏み出せた．今後，全館で対策が進むよう，全学的な情報共有を図ることが必要である．
（詳細は，本年報の報告記事「中央図書館における生物被害とその対策についてーシバンムシ被害を中心としてー」を参照）

[調査]
・トラップ調査（虫害）
　フェロモントラップ・ノンフェロモントラップを設置し，定期的な調査と交換を開始（中央図書館：6 月より）．採取された虫のうち一部について，農学研究院昆虫学講座の教員に依頼し，同定作業を実施．
・温湿度調査（カビ）
　データロガーを設置し，定点観測及び定期的なデータ回収を開始（中央図書館・伊都図書館：8 月より）．
[対策]
＜直接的な対策＞
・虫害：被害資料の隔離とくん蒸，発生場所である資料修復室の殺虫処理（薬剤散布）
・カビ：アルコールによる拭きとり（中央図書館保存書庫，伊都図書館学位論文書庫）
＜環境整備＞
・書庫の定期的な清掃（本の天や棚板の除塵，カビの除去，床の清掃）を開始（中央図書館保存書庫等：10 月より）
・清掃用品の整備（レンタルモップの契約）
・除湿剤の設置（中央図書館保存書庫等：10 月）
・貴重書室入口への粘着マット設置（6 月）
・室温上昇防止及び資料の日焼け防止策として，書庫の窓の遮蔽（中央図書館保存書庫）

2．田嶋記念財団への申請
　「新中央図書館への移転に伴う資料保存対策及び環境整備事業」として，特に緊急性が高くボリュームの大きい生物被害（虫害・カビ）に焦点を絞って申請した（不採択）．
　申請の際に，移転対象館・室の生物被害状況調査，必要な対策の洗い出しを行った．

3．新中央（文系）図書館建築計画への参画
　現在九州大学で進行中の文系地区基本設計における新中央図書館のゾーン計画について，資料保存の観点からの要求事項を文系地区基本設計コアチームへの要望に反映させて提出した．

4．修復実習の実施
　図書館職員及び学生を対象として，以下の資料の修復実習を実施した．
・初任者研修で講義と簡単な実習を担当
・九大インターンシップを受講した学生と職員を対象に修復実習を実施

5．今後の課題
・新中央図書館基本設計における資料保存の観点からの要件整理
・マイクロ資料の劣化対策
・トラップ調査及び温湿度調査のモニタリングとデータの整理・分析